
赤い道化師の箱

miora

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

赤い道化師の箱

【ISBN】

N2477Z

【作者名】

miora

【あらすじ】

時は貴族が栄える時代。ロンドンから少し離れた田舎のミルフィーではミシェル・カルセールの父、ルーカスが謎の死を遂げた。そしてミシェルの前で起きた悲劇。この二つの関係とは・・・・? 父の死因とは?ミシェルの運命は?

人は誰でも、一つの仮面を持っている。それはまるで、表面とは裏腹に腹の中で嘲笑う道化師。

ステージへと最後に残るのは果たしてだれなのか?
そのステージを操っている道化師とは?
今、今世紀最大のサーカスが幕を開ける・・・・・。

「「」主人様、此処にいたのですか
穏やかな日差しが差しかかる、今日この頃。

木の上でのんびりと読書をしているミシェル・カルセールに向かつてセイン・ファルータは言った。ミシェルは金髪の短い髪をいじりながら、頷いた。

「うん。繼承式の後片付け、御苦勞さま」

此処はロンドンの都心から少し離れた、ミルフィイという田舎。そして、ひと際大きい丘の上にある屋敷の亡き主、ルーカス・セルカール。今日は、ミシェルはルーカスが亡くなつた為に少し、早い繼承式を終えたのだった。

「いえ。それより、マロ 様が怒つていましたよ。繼承式の終わつた後は皆様でパーティーだと言つのに、主がいないとは何事だと」「パーティーか。ただ、親戚や貴族たちに挨拶するだけの退屈な催しさ。それだつたら、僕は此処で静かに本を読んでいたいよ」

「それに、その調子では主としての自覚が足りないとも仰つていましたよ」

ミシェルは思わず吹き出してしまつた。あの怒りん棒で厳しいマロ一なら、言いそうだと。

(・・・主としての自覚、ね)

あまり実感が湧かない、といつより、まだ父が亡くなつた事が信じられない。

ちょうど自分の十四歳の誕生日だった、あの嘆かわしい報告が自分の耳に届くのは。

「・・・父はどうして、こんなにも早く逝つてしまつたんだろうね
木からタン、と猫のように身軽に飛び降りた。

「・・・・・・」

セインは何も言えずにただ、ミシェルを見つめた。

「人生って言うのは何が起こるか分からない」

不意に何かを思い起こしたようにセインに言った。

「父の死因はまだ、分からない？」

「はい。ミシール警察署は未だ、調べてはいますが……」

「どうなんだろうね。何だか父の死因はこの先、何をやっても分からぬと思うよ」

「例の直感ですか？」

「ふふ。良く当たるんだ、僕の直感はね」

「知っていますよ。何年間、貴方のお傍に仕えていると思っているんですか？」

セインは乱れていたミシールの髪を直しながら、笑った。

「・・・ところで、良かったの？ 本当は僕の弟になる筈だったのに、使用人になんかになっちゃって」

「そんな滅相もない。貴方に救われて、どれだけ人生が変わったか。今でも感謝しきれないと」

「大げさだなあ、セインは」

はははっと笑って、屋敷の窓から見えるパーティーの準備をする使用者たちを見ていた。

そこにお目付役のマローが通りかかり、あっさりとミシールは見つかってしまった。

「まあ！ 此処にいらしたのですか、ミシェル様！ さあさ、もう、伯爵や貴夫人達がお集まりになられますよ。着替えてください」

「あーあ。見つかっちゃった。分かったよ、マロー。分かったから、そんなに怒鳴らないで」

やれやれと言う風に仕方なしにマローについて行く。その後をセインも付いてきた。

セインは昔からじつだった。少し、気が弱くて、周りになじめずにいた。

元々、孤児院にいたセインはそこでも、周りになじんでいる様子は無かった。そこで、父親に付いてきたミシールは何度も、父に頼み

「み、何とか、この家の養子にしてもらつことになった。

（最初のうちは大変だつたな・・・。なかなか、僕の事を信じてもらえなくて）

昔の事を思い起こすと、少し苦笑してしまつ。

なかなか、良い物ではないのだから・・・。

その時、この後何か良くない事が起つると、不意に思つた。

（あー・・・。こういう直感、良く当たるんだよね。何だろ？。この胸騒ぎは。とにかく、あまりいい物じやないな）

早くそんな事は忘れてしまおうと急いで、自分の部屋へと入つた。部屋にはいると着替える物が既に、ベッドの上に置かれていた。外を見ると、既に暗くなつており、空には星が瞬いていた。

「どうしました？先ほど、何か険しい顔をなさつていまつたが」着替えを持つた、セインが言つた

「あれ？ そつなの？ 全然気付かなかつた」

笑いながら、セインに「リボン、変じやない？」と聞いた。セインは無言で、リボンを直した。恐らく、彼は気付いているのだろう。自分が何か嫌な事でも、思つていたのだと。

「そうだ。クラリスは来るのかな？」

「・・・確かに、レオン様と一緒に出席なさると伺つております」

「レオン？ ああ、クラリスの新しい使用人か・・・。でも、嫌だな。クラリスはどうも好きになれない」

「出来ましたよ」

苦笑いをしたセインが最後に髪を整えた。

「さて、行くか」

ミシユルはパートナーへと足を進めた。

「ミシユル様、この度は誠におめでとうござります」

「いらっしゃるこそ、来てくださつて有り難うござります」

手を握り、世間話に花を咲かす。これが社交界での常識。何とも、つまらなくて、くだらない催しだと、つぶづぶ思つ。

「こちらはバー・キット夫人。代々伝わる、ニコル家の五代目であります」

紹介されたバー・キット夫人は少し、歳を召された方だった。しかし、彼女は実に優雅に、そして穏やかな口調で挨拶をしてきた。

「こんばんは。随分と可愛らしい主人でなさるのね。私はバー・キット・ニコル。愛称はバークと呼んでくださいな」

「僕はミシェル・セルカールと言います。気軽にミシェルと呼んで頂いて結構です、バーク夫人」

「では、ミシェルと呼ばせてもらうわ。・・・お父様の事、本当に残念に思うわ。非常に寛大なお方だったのに」

「父の事をそんな風に思つてくださつて、有り難うござります」

「ふふ。礼儀正しいのね。あら? 貴方は?」

セインは自分の方に視線を向けられて、とても戸惑つっていた。

「ぼ、僕はセイン・ファルータです。ミシェル様の専属使用人でございます」

慌ててお辞儀をして、テーブルの角に頭をぶつけた。

「ふふふ。楽しい方ね。あら、もうこんな時間。ごめんなさいね。折角来たのだけれど、孫の誕生日があるの。また今度、ミルクティーでも飲んで、ゆっくりお話をしましょう」

「はい、ぜひ」

「ああ。それともう一つ」

「はい?」

バーク夫人は耳に顔を寄せて、小さな声で言った。

「社交パーティーティーっていうのは退屈ね。そう思わない?」
につこりと笑つた。ミシェルもつられて、にこりと笑う。

「そうですね。その通りです」

バーク夫人は頷いて、使用人らしき人物と、一緒に広間を出て行つた。

その時、セインはミシェルの方をポン、と叩いて指をさした。

「人に指を指すのは失礼じゃないのかい?」

パー・マのかかつた水色の髪の男がにやにやとこちらへやつてきた。隣には茶髪の髪を後ろでゆるく束ねた美顔の男があぐびをしながら、言つた。

「やあ・・・・。相変わらず、退屈なパー・ティーだね」
氣だるそうにミシ・ヒルに向かつて、咳き周りをぐるりと見渡した。
「ウェイクス侯爵にロレイン夫人・・・・さつき話していたのはバー・キット夫人？」

首を傾げながら、聞いてきた。

「よく来てくれましたね、クラリス様。てつきり、こんな所には来ないかと思いましたよ」

「けつ！クラリスはお前の為にわざわざ、来てやつたんだ。ありがたく思え！」

「・・・とやけに、五月蠅い雄犬が一匹いますが、その方がレオン様？」

「んだと！誰が犬だつ！－それに男じゃない！女だ！」

セインとミシェルは顔を合わせ、もう一度レオンを見た。見た目は普通の男の子だ。着ている服装もスカートではなく、ズボンを着ている。

「な、なんだよ。じろじろ見て」

「あの、女の子ですか？」

セインはやつとの思いで口を開いた。レオンは怒つて、怒鳴りうつとしたがそれはクラリスの手によつて遮られた。

「僕の新しい使用人だよ。普通にレオンって呼んで」「はあ・・・・・

「それより、良いの？もつすぐ君の演説だよ？」

指さしたその先にはマローが険しい顔でこちらに手招きをしていた。

「まずい！忘れてた！－

急ぎ足で、ミシェルとセインはマローの方へと向かつて行つた。

「・・・・・あの人たちは、もう来てる？」

クラリスは前髪を搔きながら、レオンに聞いた。レオンはクラ

リスにくつ付き、にやにやと嗤いながらそれに答えた。

「うん もう、準備は整つたつてぞ」

クラリスはそれに少しだけ微笑むとゆっくりとレオンの頭を撫でた。レオンは嬉しそうにさらにギュッとクラリスにくつつく。クラリスは頭を撫でながら、演説をしているミシェルを見つめながら呟いた。

「ああ・・・。道化師の血塗られた演劇^{サークัส}が幕を開ける」

（くそ、早く終わらないかな。マローの話つていつも、長いんだよな）

熱心に挨拶をしているマローの横でそんな事を思っていた。ちらりと隣をみるとすでにセインは硬直していた。

（まあ、無理も無いか。こんな大勢の人の前で立つのは初めてだもんね）

でも、面白いな、と思いつつ、セインの顔見ていた。

その時だった。

「きやあああああああああ」

女の人の叫び声が耳を貫いた。

（何が起こったんだ！？）

セインも状況がつかめない様子で、じつとそこを見つめた。すると、

「さあさ、血塗られたサークัสの始まりだ」

赤い服を着込んだ五名の人^{ヒロ}が斧やら、剣やらを振りまわしていた。顔は仮面をしていて分からぬ。逃げまどう人たち。残酷に切られしていく人たち。

それぞがまるで、踊り狂うサークัสの観客達の様に何もかもが動いていた。

ミシェルはただ、立ちすくむだけだった。目の前で繰り広げられている光景は、赤い人たちはまるで・・・。

まるで、赤い道化師のようだ

その時、遠くでセインの叫び声が聞こえた。しかし、ミシェルには

それは聞こえなかつた。

腹に痛みを感じ、目の前が真つ暗になつた。何も見えなくなつた。
・・・遠くでセインが叫んでいるのが微かに聞こえた。

「ミシエル様ああああああああああああああああああああああ

・box2 サーカスの幕開け：（前書き）

パーティーで起きた事件。

どうやら、幕を開けたサークス。

ミシヨルの決意。赤い服装達の目的。

登場人物は整った。

台本がないこのサークスはゆっくりと終わりに向かって進む。
それぞれの運命の歯車が今、廻り出す。

：b o x 2 サーカスの幕開け：

○ 二四二 雜志編

遠のく意識の中で、セインの声が聞こえた。

『ニニシエル様ああああああああああああああああああああああ』

(僕は死んでしまったのか)

と笑って、前を横に向いた。

とそつくりだつた。

手を差し伸べ、そいりの肩をつかんだ。
奥へくらと、そいつは振り

業
ご。

僕は君た
眞実の君 そして 僕は君の

前編 第二回 二十九

と、近づけた。

通化館
ピエロ

その顔には道化師の仮面。^{ヒヨウ}にやりと口角は上がり、目は妖しい形に歪んでいる。

「君のその顔は本当に君のもの？」

裏の顔は何か隠してしまったの?」

ケタケタと仮面の中で奴は騒ぐ。ミシコ川は誰か分からなくなつて、一步後ずつはいた。

「何を言つて……」「

カツと額を掴んで、そいへは最後に言つた

明治文庫

全てが崩れて行き、そいつが言った言葉は聞こえなかつた。

視界が真っ白になつて何も見えなくなつた。

「ミシェル様！……」

ふつと眼を開けると、そこには見慣れた顔、セインの顔があつた。

「セ・・・イン？」

セインは目に涙を浮かべただ、「はい」と繰り返し答えた。

「『』無事でよかつたです。もう、死んでしまつたのかと……ベッドのそばで、椅子に座つていたセインは鼻をかんだ。その傍の棚の上には包帯や薬、体をふくための水とタオルが置いてあり、さらには林檎が一つとナイフが置いてあつた。

「ずっと僕の世話をしてくれたんだ。ありがとう。大変だったよね」頭を撫でて、何とか涙を止めよつとした。セインは首を振つて笑顔を見せた。

「いいえ。助かってほしいとただ必死で。疲れは感じません……」途中で言つて俯いてしまつた。気になつて覗き込むとスヤスヤと寝息を立て寝ていた。

ふつと思わず笑つてしまつた。

（ありがとう、セイン）

ミシェルは眠つているセインの頭を撫でた。その時、あいつが最後に言つた言葉が思い出された。

（何が言つたかったのだろう）

ミシェルはふと、パーティーで起こつた事件と父の死因は何か関係があるようになつた。

（あの事件を追つていけば、父の死の真相が分かるかもしない）パーティーで赤い服たちが言つていた言葉。

『血塗られたサークスの始まりだ』

血塗られたサークス。この言葉の意味とは？ミシェルは顔を手で覆い、上を向いた。

「くくくく・・・・・」

ミシェルは小さな声で囁つた。

ピカッ、ゴロゴロ・・・。

遠くで雷が鳴り、雨がぽつぽつと降つてきた。

(面白い。この事件の真相も知りたくなつてきた)

そして、ナイフを持ち、それを棚に突き立てた。

僕があいつ等の血で、このサークルを真つ赤に染め上げてやる！

幕が上がつたなら、それを早く終わるために近づけてしまおう。

・・・誰もが見たくない物語が始まるのなら・・・・・・。

コソコソと教会の中に足音が響く。主祭壇へと足を進める一つの影。主祭壇の周りには五人の男女がいた。影は仮面をつけ、赤い服を着ている。

ゴロゴロゴロ・・・。

雷はまだ、鳴つている。

「パーティーでのミシェルの誘拐計画、失敗に終わったわね」影は言った。雷に照らされた、一人の女は言った。

「そういうあんたは、何もしなかつたじゃない」

長いストレートの髪の女、リリアン・ピレットはきらりと睨んで、女の仮面を外した。

「そうでしょう？ マロー・ゴルバット」

影はにやりと笑つて、指を鳴らした。足元から黒い影がマローを包んだ。

「ミシェルのお目付役つて本当、大変」

黒い影がバッと広がり、消えるとそこには若い女が立つていた。

「こ、んな、不細工な顔でしかも、オバサンに化けるつて私には死より、苦だわ」

「けけけ。バーク。僕はずつと若いからさ。全然、苦じやないよ」

「ライアンは可愛いまんまだよ。僕はカツコいいよ」

ショートヘアの双子は言った。一人とも左右対称に、刻印が焼き付けられている。

「五月蠅いわよ、ライアン&セリアン・マルテロナ姉弟」

「そうだよ。カッコいいのはクウェイスだもん」

「ふくつと頬を膨らませ、子供っぽい口調で反抗しているのは、エミリー・ホンデス。クウェイスにぴったりとくつついて、頬をスリスリと腕にすりよせた。

「だつてさ。良かつたわね、グリーンシナー緑の罪人」

マローはクウェイスへと視線を向け、オルゴールの椅子に座った。クウェイスと呼ばれた男は無言で、エミリーの頭を撫でた。髪が透き通るような緑色が目立つ。

マローはふん、と鼻を鳴らし、思い起こしたようにリリアンに問う。「そう言えば、レイチエル様の五大遺品の一つ、『ピエロの人形』はあんたが持ってるのよね？」

髪を弄りながら、足を組み笑った。リリアンは不機嫌そうにマローを睨んだ。

「それが何だつて言うの？」

「あんたはレイチエル様に、偉く信用されているようだからね。私にも何かご褒美が欲しいなあ。例えば、美しく輝くダイヤ、とかね」にやにやと笑う、マローをよそにリリアンは懐からピエロの人形を取り出し、見つめた。

「それはレイチエル・レイチエル様がご復活なさつてからのお話よ」

ドカーン！…ゴロゴロゴロ…。

雷が近づいているのか、ひと際大きい音を鳴らし、リリアンを照らした。

リリアンの目は血で染めたように真っ赤だ。リリアンは立ちあがり、五人をそれぞれ見渡し、仮面を付けた。

「さあ！我ら、赤の道化師レッド・ピエロがレイチエル様をご復活させ、この世界を、サークスをレイチエル様のお望み通りに真っ赤に染め上げようではないか！！」

両手を広げ、ケタケタと囁つた。

「今こそ、あの時の・・・千年前の恨みを晴らす時！・レイチエル様を殺したあの忌まわしき人間どもに復讐を！！！」
教会には黒い影が、六つ。そして、六つの影は黒い影に覆われ、姿を消した。

・box3 罪の玩具：（前書き）

道化師はサークルを操り、プログラムの第一章が始まる。道化師は囁く。このサークルを止める事は出来ない。生き残るために自分の顔に仮面を張り付ける、と。そして、自分の罪に裁きを下せ。

人には必ず罪がある。裁きを下される者には「死」を。下すものには「罪」を。

それぞれの歯車は未だ、廻つたまま。

「此処か・・・」「

ミシールとセインはマローのある建物の前に馬車から下りた。

「お気を付けて行ってくださいませ。ミシェル様、くれぐれも礼儀には」

「氣を使うように、でしょ？」

ミシールはマローににっこりと笑って、足を進めた。セインもミシールについていく。

マローはそれを見送った後、馬車を進めるように前の人物に話しかけた。

「馬車を進めてくれない？クウェイス」

クウェイスは頷くと馬車を進めた。

「良いの？ミシェルにシンフルアクトを身につけて。命が縮んじゃうんだよ」

クウェイスの隣に座っていた、ヒミコーは言った。ヒミコーは飴を舐めている。

「知らないわよ。リリアンが言つたんですもの。理由は言わなかつたわ」

腕を組んで、ドアの小さな窓から見える景色を見た。

「何で突然あんな事を・・・。計画には無かったのに」

そう呟くと、ヒミコーは空を見上げて、マローにほほ笑んだ。

「きっと、リリアンにも事情があるんだよ」

「・・・事情ね」

（それなら親友の私にも言つてくれたって）

「ま、良いわ」

ぱつと髪を払つた。

パカパカと馬車は進んでいった。

一方、ミシェルはミゴール警察署の受付で揉めていた。

「だから、ミゴールさんに会いたいの！」

ミシェルは受付の男の人へ怒鳴った。

「ですから、予約された人しか会えません。それに今はミゴール様は外出して不在です」

「あ、あの、ミシェル・セルカールで予約をしたのですが・・・」セインはモゴモゴと口を小さく動かして、抗議した。

「予約リストには書かれていませんが」

「そんなはず無い！！よく探して！」

ミシェルは大きな声で怒鳴った。その時、肩をポンと誰かが手を置いた。

「そんな大声で叫んでは、皆が驚くじゃろう？坊や」

振り返ると、白い髪を生やしたおじいさんが笑つてミシェルを見つめていた。

「ミ、ミゴール様！！」

受付の人は叫ぶと、周りの人々はお辞儀をした。

「貴方がミゴール・ヴィグレットですか？」

ミシェルは振り返つて、きいた。ミゴールと呼ばれた人は頷いた。

「いかにも。して、なぜこんなにかわいらしい坊やがいるのかな？迷子かい？」

ミシェルはちゃんとミゴールと向き合つた。そして、軽く会釈をした。

「ミシェル・カルセールです。貴方と話がしたくて、来ました」

「カルセール・・・。ああ！君はルー・カス公爵の息子かな？」

ミゴールは手を差し伸べ、握手をした。

「こんな所でお会いするなんて思わなかつたよ。・・・お父様のことは誠に残念だ。しかし、気を確かに」

優しくほほ笑まれ、ミシェルは頷いた。セインに目をやり、ミゴールにセインを紹介した。

「こちらはセイン・ファルータです」

その時、ミゴールの顔がピタッと止まつた。

「セイン・ファルータ……？」

「……？」

セインの顔をまじまじと見つめた。セインは思わず、後ずさりをする。

「はて？ どこかで聞いたような名前だつたんじゃが……。思い出せんの？」

ミゴールは首を傾げ、しばらぐ考え込んでいたが首を振るとミシルとセインに笑いかけた。

「駄目じゃのう。」の頃、どうも歳でいかん。まあ、その内、思い出せるじゃね？」

そうこつた後、受付に言った。

「」の一人はわしの部屋に連れてゆく。署名に記入しといてくれ「

「し、しかし、予約リストには……」

「ほつほつほつ。たまには突然の来客も悪くなからつ。皆の者、持ち場に戻りなさい」

ぱつと人がまばらに動いた。ミシェルとセインはミゴールに連れられ、部屋に辿り着いた。

ミゴールは紅茶とケーキを持つてくると、一人を椅子に座らせた。その向かいの椅子にミゴールも座つた。

「さて、話とは？」

「僕の継承式が終わつた後のパーティーで赤い服の者たちがいきなり、襲つてきた事件をご存知ですか？」

「もちろん。それをルーカス公爵の事件とともに、調べておる」

「それは何か、関係があるとお思いで？」

「左様。君の周りで一件も事件が続いておるのだ。関係が無いとは到底、思えん」

ミゴールは紅茶に、ミルクを入れ、一口飲んだ。セインはモゴモゴと口を動かし、言った。

「それで、その僕たちもその事件を調べたいのです」

ピタッと、ミゴールの動きが止まつた。ミゴールは真剣な顔で一人を見つめた。

「君たちはまだ、若い。この事件に関わっていたら、危険な目に遭う」

首を振り、ミシェルに告げた。

「この件には深く関わらない方が良い」

「でも、ルー・カス様の死因が知りたいんです！」

「ここまで語つても分からんかね。危険だと言つてあるんだぞ？」

駄目だ、とミゴールが言おうとした時、黙つていたミシェルが口を開いた。

「危険な目に遭つてます。それに今更、関わるなつて、既に関わつてしまつてます」

ミシェルは真っ直ぐにミゴールを見詰めた。

「覚悟は出来てます。生半可な気持ちでこんな所にいるんじゃないんです」

セインも頷いた。先ほどのモジモジした顔は無く、目は真剣にミシェルと同じようにミゴールを見つめている。ミゴールは暫く、一人の顔を見つめた。そして、ため息をつくと、

「はあ。若い者には敵わんの。じゃが、その目は立派じゃふつと笑顔を見せた。

「よからう。君たちはミゴール警察署と一緒に調べてもらう。君たちを全面的にサポートしよう」

二人は笑つて、お互いを見合つた。しかし、ミゴールは真剣な顔に戻ると、ミシェルを見つめた。

「しかし、この件に関しては少し、特別じゃ。君らのどちらかは『シンフルアクト』と契約してもらひ」

「シンフルアクト？」

首を傾げ、ミシェルはきき返した。

「うむ。シンフルアクトは人の罪を形にしたものじゃ。それは武器として扱う。じゃが、シンフルアクトを扱う者は裁き人によつて、

使うたびに命を削られる」「

「け、削られるつて！」

セインは立ち上がり、怒鳴りついた。それをミシールは止めた。

「セイン。ミゴールさん、続きを」「

セインは仕方なく、座り、ミゴールは頷いた。

「これが赤い服たちから守る、一つの方法じゃと思つてある」「

「それは赤い服たちはただ者では無いとおっしゃりたいんですね」「

セインは目を見開き、あの時の事を思い起した。

「サークัสの始まりつて・・・」「

セインは小さく呟く。それは一人には伝わらなかつた。ミゴールは続けた。

「昔の歴史書を見ると、およそ千年前、レイチエル・ソルシアーナ」という女性がパールという町で大虐殺をおこなつたと言われている

「あの千年前の『血塗られた大虐殺』事件ですか？」

ミシールはきいた。ミゴールは頷き、続ける。

「その時に今回の事件と同じように赤い服を着た者たちがレイチエルと共にいたという」「

「え・・・？」

「千年前の人がまだ生きていて、僕たちを狙つていると？」

「それだけではない。レイチエルはセトリック教会の神父たちの手によつて死亡したが、赤い服たちは生き続け、またレイチエルを復活させようとしている」「

「ちょ、ちょっと待つてくださいー！」

ミシールは立ち上がつた。

「千年前の人たちですよ？生きている筈がない！きっと誰かがが千年前の真似をしようとしているんだ！」

ミシールは動搖していた。

（千年前の赤い人たちはどうやって、生きてきたんだ！？）

ミゴールは写真を取り出し、本棚から一冊の本を取り出した。座るページをぱらぱらと捲つていぐ。

「これじゃ。これらは赤い服たちの当時の写真が載つてある。そして、これは最近入手したものじゃ」

そこには緑の髪の男の写真が載つており、下には名前が記入されていた。

「クウェイス・ハロン・・・？」

「うむ。そして最近の写真」

「！」

そこにはクウェイスと同じ顔の男が女の子と手をつないで歩いているところが映つていた。

「そんなバカな・・・」

セインは言葉を失つた。ミシェルは黙つて、その写真を真剣に、見詰めた。

「何かの力によつて生きながらえたんじゃね？。これで分かつたじやろ？。シンフルアクトと契約を交わすしかない。どちらがシンフルアクトと契約するかの？」

最後に一人にきいた。セインは「くつと唾を飲み、口を開こうとした。

（僕が、ミシェル様を、ご主人様を守るんだ！）

セインは決心をし、口を開こうとした。その時だつた。

「僕がシンフルアクトと契約する」

ミシェルが真剣なまなざしで、ミゴールに言った。

・box4 「口の罪」（前書き）

『罪人』。それは神に背きし者。

『裁き人』。それは神に従い、裁きを下す者。神に従う者と背く者。

そして『罪人』は己の真の罪に驚愕し、絶望する。ひとは誰でも罪はかならず持つている。

それを人間に持たせたのは他でもない。『神』である。神は道化師に言った。

「己の罪に、決して田を背けてはならない」と。道化師は囁つた。

「ならば、お前の罪は、愚かな人間どもの運命に無理やり、『罪』という名の最悪の幸福を入れてしまつた事だ」道化師は囁つた。

「お前こそ、己の罪に決して、田を背けるな」道化師は仮面を外す。

「そうだろう？ だつて私はお前の生んだ、『罪』なのだから」神は怒り、道化師を地獄へと貶してしまつた。

それでも道化師は囁い続ける。闇に染まつたこの世界で、悲劇^{サーカス}の第一章の始まりさ、と。

己の罪・
box4

『僕がシンフルアクトと契約をする』

セインはミシェルを見つめた。

三・二・シニ川様

「セイシング業の裁き人となるんだ」

「何を言つてゐんですか！そんな事をしたらミシェル様のお命が！」

1

セインは呟いた。感謝の意を込めて。命より大切なこの主人様を気づけたくはない。と。

貴方様の話を聞かなくて出来ません

ミシェルは力無く、笑つた。

「セインが裁き人になつてほしいんだ。僕はセインが思つてゐるよう

「そんな事はありません」

じているんですか！？

卷之三

セインは言葉を詰まらせた。ミシェルは静かに続けた。

「僕はまだ信じられないよ。でもね、今のは本當だった。」
「ううん、僕はまだ生きていって欲しいんだよ。」

「そんな事……」

「僕は十分、セインに守つてもらつた。だから今度は僕が守るよ」

「セイシ。」
使用

「セイン。使用者を守るのも、僕の、主の役目なんだ」
につこりとセインに向かつて笑つた。

「守つてもいらうだけじや、きつと僕の周りから消えてしまつ」

- 1 -

「父さんも、母さんも屋敷にはいない。僕は一人ぼっちになつてしまふのは、嫌なんだ」

卷之二

セインは涙を流し、顔をあげた。その顔には笑顔があった。

……分かりました。でも、僕にもやつぱり、貴方を守らせて

ぐたさい 僕も一人はモニ嫌ですか?」

「うん」

ミシェルはセインの頭を撫でて、いつた。

۷۰

「それでは始めるぞ」

ミシェルは暗い部屋でシンフルアクトと契約を交わす儀式を始めていた。ミゴールの声は「わん、ごわんと部屋に響いた。ミシェルの隣にはセインが手をつなぎ、立っていた。

「暫く、つらいかもしけんが、我慢してくれ」

「アーリーとセイントは馬鹿を騒ぎ、笑いながら

「・・・それでは

「ゴールは、シェルの胸に手を置き、何かを唱えた。

「我、神に使いし者。哀れな罪人に罰を。そして裁き人を与えよ」

が起きた。

セインにも同じ事が起っていた。体に湧き上がる体が張り裂けそ

うな痛みと、ふつふつと血が煮えたぎるような熱さが続いた。

「あぐ・・・うがつ！」

体は石のように固まって、動けない。ミゴールは手を首へと持つていき、最後に唱えた。

「この者には、シンフルアクトを」

言い終え、手を離すとミシェルとセインははづくまた。

「はあつ・・・はあつ」

息が切れて何も言えない。顔は汗でべつとじと濡れていて、呼吸をするので精いっぱいだった。

「大丈夫かね？」

ミシェルとセインにミゴールは声をかけた。

「だ、大丈夫です」

「はい・・・。平氣です」

やつとの思いで返事を返す事が出来た。

「そうか・・・。良かつた」

ミシェルはセインに顔をむけると、セインはミシェルの首元を指さしていた。

「ミシェル様、その刻印は・・・？」

ミシェルは何を言つているのか分からなかつた。首を傾げ、ミゴールを見た。

ミゴールはこつこりと笑つて、部屋のドアを開けた。

「一休みをしてから、君たちに説明しよう。・・・紅茶でも用意しようかの」

紅茶の良い香りがセインとミシェルの気を落ち着かせた。一人は一口、それを飲むと体の底から、体力が回復してくるような、そんな感じがした。

「少しは落ち着いたかね？」

ミゴールはクッキーの缶とキャンディーを持ってくると、テーブルの上に置き、一つキャンディーをつまんだ。

「さて、ミシェル君の首にあるその刻印は、罪人・・・シンフルーグトを持つ者に付けられる」

「僕の首に刻印が・・・？」

「うむ」

ミシェルの首には確かに、十字架に羽が絡まっている刻印が付けられていた。ミゴールはキャンディーの包み紙を剥がしながら、続けた。

「シンフルーグトは罪人にとっての裁き人、つまり君の場合、セイン君に許可をもらわなければ使えない。そして、君の罪は・・・」胸のポケットからカードを取り出し、それをトン、とミシェルの額に当てた。すると、カードに男の子が小さく^{書き}、頭からは何か、白い^霞の様なものが出ていた。そしてその子の手には槍。

「・・・『忘却』じゃの。君のシンフルーグトは『忘却槍』じゃ」「忘却？ミシェル様が何か、忘れていてそれが罪だと？」

セインは眉を寄せた。

「ふうむ。わしには何とも言えん。己の罪は己で見つけ、償つものじゃからの。他者には他者の罪は分からない」

「己の罪・・・」

ミシェルは呟いた。

（僕は何を忘れているのだろう？どうしてそれが罪なのだろう？）

「罪を見つけるって、一体どうやって？」

「ある人物は突如思い出し、ある者は人から自分の罪を聞かされ、償つた。色々な方法で見つけた。しかしそれは決して、偶然ではない。神が運命の中の人を正す為に組み込んだ『必然』な『偶然』なのじゃよ。じゃから必ず、いつか、そして思いもよらない方法で分人間は己の罪を分かつてしまうのじゃよ。それは実に残酷じゃ。じやが、それが罪人にとって幸福なのかもしれない。まさに神がわし等人間に仕組んだ、とんでもなく残酷な幸福なのかもしけんの。・・・悲しい事にな」

ミゴールは口の中にキャンディーを入れると、口の中で転がした。

ミシコルは紅茶をまた一口飲むと、ふと、ある疑問が浮かんだ。

「あの、先ほどの千年前の『血塗られた大虐殺事件』で質問があるのですが……」

「ふむ。聞こう」

「何故、レイチャエル・ソルシアーナを復活させるのにこんなにも、時間が掛かるのでしょうか？」

「・・・・・」

「ひょっとしたら、レイチャエル・ソルシアーナの復活には何か、必要な物があるのではないのですか？」

（でも、それだけじゃない。それだけだったら、こんなにも時間はかかるない筈だ。他に何かがあるのかもしれない。僕のパーティーでの事件も、父さんの事件も何か関係があるとしか思えない。待てよ？もしかして・・・）

「ミゴールさん。これは僕の、あくまで僕の予想ですが、レイチャエル・ソルシアーナと僕は何か関係があるのでは無いのでしょうか？」
ミシコルはミゴールを見つめた。ミゴールは一瞬、目を見開くと、突然何かを思い起こしたように立ち上がり、バツと本棚の中をあさり始めた。本をバサバサと床に落としていく。

「ミゴールさん？」

セインは心配そうにミゴールを見つめた。無理もない。なぜなら、狂つたように本棚をひっかきまわし始めたのだから。しかし、ミシコルにはその意味が分かっていた。これから来る真実に覚悟を決めて・・・・。

・box5 真実：（前書き）

道化師は暗闇の中で、『真実』に怯える子羊を見つけた。

「真実が怖いのならば、仮面を付けよ。そうすれば怖くない」
子羊は仮面を付けた。そして嗤つた。

「ほんとだあ 『真実』なんて怖くない」
これが『偽り（道化師）』の『真実』。

仮面を付ければ、偽り。真実なんて何処にも無い。
道化師は子羊に囁いた。

「もつと、『友達』を増やそうか？」
子羊は満面の笑顔で言つた。

「うん 笛を鳴らして、子供たちを呼ぼう」
道化師は笛を鳴らす。笛を鳴らしながら思つた。
偽りは苦しいもの。醜いもの。
そんな事を言つたのは誰だつけなあ 。

「あつた・・・」

ミゴールは一枚の紙を取り出した。紙は黄ばんでいて、所々が破れていた。

「何ですか？これ」

セインは紙を覗きこみ、聞いた。

「これは千年前の『血塗られた大虐殺事件』のレイチエルが殺される前に残した、遺書じゃよ。・・・恐らく彼女は、自分が殺される事を予知しておつたのじゃね？」「

「何て書いてありました？」

「ううむ・・・所々、文字が消えていて上手く、読めんが・・・やつてみよつ」

ミゴールは遺書を読み始めた。

『信頼を置ける、赤い道化師達よ。これを読んでいるのかしら？』
『我が読まれてているという事は私は死んだのかしら？』
でも、悲しまないで。赤い道化師達さん。私は復活する事が出来る
の。でも、貴方達に頼みたい事があるのよ。やつてくれるかしら？
「ピエロの人形」、「絵本」、「壊れたハーモニカ」、「銀の鍵」、
「金の錠」。

これ等をどうか、探してちょうだい。
そして、私を復活させてちょうだい。

また貴方達と一緒に、この世界を真つ赤に染めたいわ。

神父達に私はこれから、殺されてしまうかもしねいけれど、貴方達が私を復活させてくれるつて信じているから、怖くないわ。

それと探す時に、私の大好きな人「アランド・セルカール」、の子孫を探してね。

その子がこれ等を探す、手掛かりになるわ。

それとね、貴方達が死なないように、この遺書には魔法を掛けてお

いたわ。

それは「永遠」で「脆い」ものだから、氣をつけてね。

赤い道化師 レイチエ

ル・ソルシアーナ『ミゴールは一通り、読み終えた。

（アランド・セルカールの子孫……。これか。だから奴等は、僕のパーティーに現れたんだ。僕を使って、遺品を探し出そうとしてるんだ）

「何と言つ事だ。レイチエルの五大遺品にこんな意味があつたとは…

「五大遺品？先ほどのレイチエルが探してほしいと言つた、あれですか？」

「うむ。我ら、警察署の人間はそう言つてゐる。神父達が、これ等をレイチエルが死ぬ前に回収し、厳重に保管しておいたはずだった『『はずだつた』と言う事は、紛失してしまつたのですか？』

「いや、盗まれたのじや。何者かによつて」

「では、それが敵、『赤い道化師』でしょうか？そいつらに渡つたという事は有り得ないですね。現に今、まさにそれを探している様子ですから」

セインは考え込んだ。

（しかし、盗んだ奴は一体何のために？そして、どうやつて、盗む事が出来たのだろう？）

「でも、これで確信した」

「？」

ミシユルが笑つて、セイン見た。

「どうして、僕のパーティーに『赤い道化師』達が現れたのか。どうして、父さんは死んでしまつたのか。僕に全てが関係してゐるんだ。それにこの二つの事件のつながりがようやく、見えたよ」

セインは頷いた。ミゴールも頷いた。

「やっぱり、この事件を追つて行こう。僕の罪、『忘却』の意味と

父さんの死因。そして、レイチエル・ソルシアーナとアランド・セルカールの関係も知りたい。僕に関する全ての真実を知りたいんだ」

「ミシェル様……」

「その真実がどんなに、恐ろしいものであっても僕は受け止める。真実から、目を背向けたりなんてしない」

ミシェルのその瞳^めには強い光が宿っていた。

セインはその瞳^めをみて、思つた。

これから起こるであろう悲劇^{サイカス}に希望の光が宿るのだと。

セインとミシェルはミゴール警察署を後にし、細い路地を歩き、屋敷へと向かっていた。

『手始めに、この五大遺品を探そう。何か情報を掴み次第、そちらにも連絡しよう。・・・気をつけなさい。あやつらは何処でも、どんな時でも君を狙つているだろ』

ミゴールが別れ際に言つた、言葉をミシェルは思い出した。

（・・・僕にはインフルアクトがある。でも、奴らの情報が少ないから、どれ程の力を持つているのか分からぬ。十分に気をつけなくては）

ミシェルの足には自然と、慎重さが感じられた。セインもまた、これからのことを考えていた。

（こぎとなつたら、僕がミシェル様をお守りするんだ。この命を懸けて）

「きやははは。ミシェル・セルカール発^ハ見^ル」

「きやははは。本当だね、ライアン 今日は何て、幸福^{ラッキ}なんだろ

うね

突然、バサツと田の前に赤い服の顔の良く似た、二人の男女が降りてきた。

「よお～ろしくねえ。ミシェルう～」

「！？」

「貴様ら～あのパーティーの時の！？」

セインが叫んだ。双子はにたあと嗤つた。パーティーで『サークスの始まりだ』と叫んだ奴らだった。

「そだよ 僕らは赤い道化師、『レッド・ピエロ』のメンバー、ライアン&セリアン・マルテロナ姉弟だよ」

「赤い道化師つて、レイチエル・ソルシアーナの遺書に書いてあった……」

「レイチエルの手下か！？」

双子はきょとん、と顔を見合させ、首を傾げた。

「手下？違うよねえ？」

「うん。僕らはレイチエルのお友達だよ？」

「お友達？」

「うん 僕らはねえ。レイチエル様に拾われたの」

「それでね、レイチエル様が友達になつて、遊んでつて言つたから、遊んだんだよ？」

そう言つた瞬間、二人の額から、刻印が現れた。

「あれは……！」

「奴らも、シンフルアクトを持つているのか！？」

「ですが、ミシェル様、奴らは『裁き人』の許可をもらつていません！」

「きやは レイチエル様の魂が僕らの『裁き人』 そして、魂は僕らにも君らにも見えないんだよ？」

「何を言つて……！」

双子はカードを取り出した。そのカードには悪魔が盾と矛を持つている絵が描かれていた。

にゅつとカードから影が飛び出たかと思うと、それらは盾と矛になつた。

「僕らの罪はあ、『悪魔』なんだ」

「ライアンのシンフルアクトは『悪魔盾』」

「セリアンのシンフルアクトは『悪魔矛』」

愛おしげに二人は、シンフルアクトを見つめた。

「遊ぼお ミシェルと遊んであげてって、レイチャエル様が言つてゐるのよ」

二人は狂つたよつにそつ言つと、セインに向かつて、攻撃をし始めた。

「「きやは お前は邪魔だよお レイチャエル様が要らないってえ」」

「・・・・・」

「セインシッシッ！」

ミシェルは叫んだ。それと同時に砂埃が巻きあがり、三人の姿は見えなくなつた。

「・・・・・」

「せ、セインシ！」

ミシェルがセインの元へ走り出そうとした瞬間。

キンシ。

「僕は気が弱いけれど・・・」

砂埃からの中から、ライアンとセリアンが飛び出してきた。いや、飛ばされて出てきた。

・・・セインによつて。

「ご主人様の為なら、いつだつて、僕は強くなる！－！」

セインがゆつくりと、砂埃から出てきた。その手には小さなナイフがあつた。倒れていたライアンとセリアンは、ゆらりと立ちあがつた。その顔には無邪気な笑みがあつた。

「わあい 楽しいな、楽しいな」

「早く、ミシェルと遊びたいけど、お前とも遊びたいな」

セインはミシェルの前に立つて、言つた。

「・・・ミシェル様、そこでじつとしていて下さいね？」

「セイン？」

セインは笑つて、ミシェルを見た。

「いつもご主人様に守られていてばかりでは、使用人失格なので」

そう言つと、ナイフをセリアンとライアンに突き出し、叫んだ。

「僕はミシェル様の専属使用人、セイン・ファルータだ！これ以上、

「ご主人様を傷つけようものなら、僕が斬る！」

セインにはいつも弱気な姿はなかつた。

その田には光が宿つていた。ミシェルは思った。

（いつの間にこんなに強くなつたんだろうね？僕が見ない間に、逞^{たくま}しくなつてさ）

ふつと笑みがこぼれた。

「・・・死んじゃ、駄目だからね？」

セインは頷き、一人に向かつて、風のように向かつて行つた。

カキンツ、カンツ。

小さなナイフで、セインは見事な身軽さでライアンの長い矛をわしてゆく。

「きやは、お前、セインって言つんだね。さつきの瞳とは随分、違つねえ。良いなあ・・・。

その瞳、さりげらしてて、可愛い。僕ね、小さい子つて大好きなんだあ」

ライアンはセインの腹を目がけて、振り下ろす。

セインはそれをナイフですばやく、防いだ。

キンツ。

金属がぶつかるような、音が響いた。

「僕は小さい子じゃない。ご主人様、ミシェル様のお傍には小さくて、よわい子なんて要らない」

（いつだって、そうだ。僕はミシェル様の後ろを付いて行くばかり。ミシェル様の背中は温かくて、大きいけれど、もうこれからは頼つてばかりじゃいられない！）

「きやは、本当にそうなのかなあ？」

「ー?」

いつの間にか、ライアンの顔が間近にあつた。

「そうじゃないでしょ？お前は、ミシェルがいなかつたら、なんにも出来ない、ただの『小さい子』なんだよ。本当のお前は『小さい子』なんだよ。」

バツと後ろに後ずさりした。

「何を言つてゐるんだ」「

「『『大きべ』て、強いつて『『仮面』』を被つてゐるだけなんだつてばあ」「

「何つ！？」

シユンツ。ピシユツ。

ぽたつ。

セインの頬から、一筋の血が流れ落ちた。

(いつの間につ？)

「無駄無駄。僕は強いんだから 無理しちゃ、黙目だよ。『道化師』

「誰が、『道化師』だツ！」「

シユンツ。カキンツ。

「僕は『道化師』なんかじゃない！ミシェル様の為なら、命だつて捧げられる！」

ケタケタとライアンは嗤い、矛を振りまわした。

「『道化師』だよお『小さい子』の癖に、『大きい子』の仮面を被つちやつて。そんな子には僕から、お仕置きだよお」「

ダンツとジャンプして、すばやくセインの背後に回つた、ライアンは上から、矛を振り下ろす。

「ごめんねえ お前の事、大好きだけど、レイチャエル様が殺せつてさ

（しまつた！後ろを・・・）

目を瞑り、覚悟を決めた瞬間。

バシユツ。

・・・くツ

「なツ！？」

目を開くと、そこにはセインの目の前に立ちはだかり、腕を切られ

ている、ミシェルの姿があつた。

「ミシェル様！お怪我を・・・」

セインがミシールに駆け寄った。その時、パンツ。

ミシールは両手で、思いつきりセインの両頬を叩いた。

「いつたーッ！何をするんですか、ミシール様！」

「何をするんですか、だつて？」

「え・・・？ミ、ミシール様？」

ゆらりとミシールは立ちあがり、セインをぎらりと、睨んだ。その背後には鬼がいた。

・・・恐ろしい姿だ。

「あ、あのあ・・・一体？」

ビシッとこきなり、ミシールが指をさし、早口でべらべらとお説教を始めた。

「まだ自分が言っていた事が分からぬのか！？僕の為に命を捧げる？僕の為？ふざけるなあ！お前は僕を言い訳にして、偽善ぶつてるだけだろ、この『偽善者』がッ！大体、あのライアンつて奴の言う通り、『小さい子』の癖になに、強がってるんだ、ヘタレが！ああ、そうだ、お前は『ヘタレ』だッ！その言葉の方がしつくりくる！全く！折角、強くなつたなあと感心していたら、いきなりこれがよッ！？どんなオチだよ！ええ！？さつき言つていた事を反省しろ、このヘタレッ！」

はあ、はあと息を切らすミシール。セインはポカーンと口を開け、茫然としていた。

「・・・もう僕の為について言つ理由で戦うなよ。これ以上自分を傷つけてどうするんだ」

セインは自分の言つていた事をよづやく、理解した。

（何だ、何をやつているんだ、僕は。こんなにも主^{おも}を傷つけて・・・。これじゃ専属使用人失格だよ）

「全く、世話の焼ける奴だよ、セインは。黙つて見てられないよ・・・」

ミシールは笑った。セインも笑った。

「僕も戦うよ」

ミシェルは真剣な眼差しで、セインに言った。セインも頷き、首の刻印の上にカードを当てた。

「神よ、我は『罪人』を裁く、『裁き人』。裁き人にシンフルアクトを使用する許可を『える』。どうか、この『罪人』にシンフルアクトを」

「きやつは 何だか、良く分からぬけど、とりあえずセインは死んじやえ！」

「ライアンばっかりずるいい。僕も遊んでえ 」

セリアンは叫んだ。ライアンはにつこりと微笑み、セリアンに言った。

「じゃあ、二人で半分こね 」

「うん 」

一人はセインに向かつて、突撃した。

「きやはははは バイバイ、セイン 」

砂埃がまた巻きあがつた。その中で双子は嗤いながら言った。

「・・・誰がバイバイだつて？」

「「！？」

ビュンッ。

風が巻き起こり、双子は目を見開いた。

そこには槍を持った、ミシェルが盾と、矛の両方を防いでいる姿があつた。

「僕の罪は『忘却』。そして、僕のシンフルアクト、それは・・・」

「「『忘却槍』」

双子は声を揃えて、呟いた。ミシェルは槍に力を込めた。そして、ふつと頭によぎつた言葉をいつの間にか、声に出していた。

「『神の罪槍』」

「「！？」

ビュンッ。

槍が突然白く光り出し、ライアンとセリアンを、吹き飛ばした。

「凄い・・・。あの双子を一気に

セインは咳き、槍を見た。

(ミシェル様のさつき攻撃は・・・『罪人』が撃つ、攻撃とは思えない。もし、さつきの攻撃が本当に「罪の槍」が撃つた攻撃ならば、それはまさに、神のもの。これが『神の罪槍』！)

「あつれえ～？お前、シンフルアクトを持っていたの？

「どうりで、シンフルアクトの存在を知っていた訳だあ

二人はケタケタと嗤つて、ミシェルを見た。

それはまさに悪魔の嗤い。

狂つた「悪魔の双子」は叫び出す。

「きやつは～ 楽しいなあ 」

盾と矛を持った「悪魔の双子」は、ルンルンとした口調で、言つた。

「遊びはまだまだ、これからだよお ミシェルう～ 」

・book 6 過去・（前書き）

『過去』。

それは生きている限り、付いてくるモノ。

脆く、気付けばそれすらの存在を忘れてしまうモノ。

それでも、『過去』は存在し、付いてくる。

それは『脆く』で、『確実』なのだ。

『過去』は書き換えられない。

忘れてしまっていても、いつかは思い出す。

それは残酷なのかも知れない。

苦しい『過去』ならば。

でも、時には楽しい『過去』だつてある。

そんな『過去』を振り返り、幸福になれる人間は羨ましい。

道化師は壊れた時計を取り出し、見つめた。

何故、羨ましいかって？

それは僕がそんな『過去』を幸せだと思えない、愚かな道化師だからだよ。

キンッ。シoun、シuヒッ。

ミシuルは相変わらず、双子と戦闘を繰り広げていた。

「はッ！一体、その小さい体に何処にそんな力があるんだ？」

槍を突いても、ライアンの盾で防がれ、その隙にセリアンに矛で攻撃をされる。

セリアンの場合、思いつきり槍で突いても、ビクともしない。それどころか、逆にミシuルが盾で押し返されるほど。

「きやはは 僕ね、『大きい子』つて大好きなんだ だつて、強いし、カッコいいでしょ？」

「は？」

ミシuルは聞き返した。セリアンはにやりと嗤つた。

「だつてね？僕ね、もの凄く我が儘だからね？『大きい子』に背負つてもらわないと駄目なの」

セリアンは続けた。

「それでね？ミシuルとセインのやりとりを見てたら、セインが羨ましくなっちゃつた

ふつと、ミシuルも笑つた。

「何で？」

聞き返すと、セリアンは「きやはは」と笑つた。

「セインの事は僕が守るから、つていう時にね、ミシuルの背中つて温かくて、大きく感じるんだあ」

そう言つと、双子は突然、攻撃を止めた。

「何・・・？」

「アランド・セルカール様もそんな人だつた」

「やつぱり、アランド様の血は争えないね 見た目も性格も全て似ている」

「だけどね、僕らは寂しくなんかないんだ」

「だつてね、レイチエル様が喜んでいるから」「僕らも喜んでいるから」

「・・・・・」

「だから、僕はミシェルが大好き」

「へえ？ アランドって人、レイチエルって言つ人好きになる位、立派な人だつたの？」

ミシェルは俯き、聞いた。

「うん だ「見つけたわよ、マルテロナ姉弟」

セリアンが口を開きかけた時、頭上からりん、とした声が降つてきた。巨大なウサギの人形の上にのつていて、その人形はふわふわと宙を浮き、やがて、双子とミシェルの間に降りてきた。

「また、あんた達、勝手な事をして！ 何、計画を無視してんのよ」リリアン・ピルット。双子が見当たらないので、今まで探していたのだ。長いストレートな髪が印象につく。色は茶髪で、ツヤがあり、顔も整つている。

リリアンは目をミシェルに向けると、にこりと笑う。その顔にいさか、ミシェルもドキッとしてしまう。

「やはり、アランド様に似ていますね、ミシェル様。この双子がご迷惑をお掛けしました」

そう言つと、リリアンは頭を下げた。

「本当に迷惑だつたんだけれど、さつさと双子を連れて行つてくれる？」

「・・・ そうですね。 そうします。 性格はアランド様に似てないようですが」

ミシェルは笑つて、リリアンを見つめた。

「はは。 そうみたいだね。 言つておくけど、僕はそのアランドって人に似てないと思うよ？ 寛大でじやないし、性格も良い方ではあるけど、それでもアランドには遠い存在だと思うよ」

「・・・・ 帰るわよ、マルテロナ姉弟」

三人は人形にのつた。リリアンは振り返り最後にミシェルに告げる。

「ミシェル様、それでも貴方は『正直さ』という面ではアランド様に似ていますわ」

「それでは御機嫌よう」トリリアンは最後に言葉を残し、あつとうまに人形は豆粒ほどに小さくなってしまった。

「ツ」

ミシェルがその人形を見送った直後、どくん、とミシェルの心臓が波打つた。

「ミシェル様！」

倒れそうになつたミシェルを慌ててセインが受け止める。視界は真っ暗になり、ミシェルは意識を失つた。

「今から、孤児院に行くんだ。ミシェルも行くかい？」

温かい笑顔で、ミシェルに手を伸ばす、父、ルーカス。

「うん！僕の弟を選ぶんだよね？」

幼いミシェルは、満面の笑顔でルーカスに聞いた。

「ああ・・・。そうだよ」

ああ、これは過去の記憶か。懐かしいな。

ミシェルは暗闇の中でルーカスと幼いミシェルの記憶を見つめ、立つていた。

孤児院。そうか、ちょうどクリスマスにセインを養子にしたんだつけ。

目の前で、ミシェル達の周りの景色が一変し、二人は雪が降る街の中を歩いていた。

ルーカスの隣で、一生懸命に話しかける幼いミシェル。ルーカスは微笑みながら、それに応えていた。

しばらくすると、二人の目の前に大きな孤児院が現れる。その中に二人は入つて行つた。

また、景色は一変する。

「まあ、ルーカス様。ご無沙汰です。この子がミシェル様？」

歳の老けたおばさんがルーカスに話しかけてきた。

「ああ、やうだよ。とにかくで、早速見ても良いかな?」

「もちろんですとも」

三人は歩いて、廊下を歩いた。その先にあるドア。それをおばさんが開いた。

「さあ、選んでいいぞ。ミシェル」

その部屋の中にはほんわりと明るい光の中で、遊びまわる子供達。

ミシェルにはそれが眩しく感じた。

楽しそうだな、眩しいや。

ミシェルは疲れて、その場に座り込んだ。映画を見ているような感覚で自分の過去を振り返るのは何とも不思議な感覚だつた。

幼いミシェルは遊びまわる子供たちの中を歩いた。プレゼントを包んでいる子もいれば、クリスマスツリーの飾り付けをしている子もいた。皆仲良く、それぞれクリスマスに向けての準備をしている。ただ一人、幼いセインを除いて。

セインは部屋の隅でうずくまり、顔を組んでいた腕に埋めていた。

幼いミシェルはセインを見つけた。セインに近づき、話しかける。「きみ、こんな所で何をしているの?」

セインはピクリとも動かない。幼いミシェルはその隣に座つた。その時、セインの肩がピクッと震えた。幼いミシェルはそれに気づいてはいたが、話しかけずにじっと遊んでいる子供たちを見つめた。しばらくの沈黙。聞こえるのはがやがやと騒いでいる、子供たちの声。それしか聞こえなかつた。そんな沈黙を破つたのはセインだつた。

「君は・・・親に捨てられたの?」

顔を埋めたまま、ミシェルに質問をした。

「つうん。僕はね、弟を選びに来たの」

幼いミシェルは笑つて、それに答えた。幼いミシェルは続けた。

「でもね、お屋敷にはね、お母さんはいないんだ。お母さんは僕がちっちゃい時に出て行つちやつた」

「・・・・・」

セインはまた、黙り込んだ。それでも続けた。

「でもね、それからお父さんは早く、仕事から帰つててくれるよつこなつたんだ」

「・・・・・」

「それでも、やつぱりお父さんがいなつ、寂しいから弟を貰つことにしたの」

「・・・・・」

「でも、まだ、良い子はいなつ」

「・・・・・」

「君は親に捨てられたの？」

「・・・・・」

幼いミシェルは耳を傾けた。すると、腕の中からせじやくり上がるような声が聞こえた。

セイン・・・。

ミシェルはその光景を目にし、少し、目をそむけたくなつた。記憶の中で幼いミシェルは肩をポンポン、と叩いた。つして、にっこりと笑う。

「きーめたつ」

短くセインに囁きかけるように耳に小さな声で言った。

その時、初めてセインが顔をあげた。幼いミシェルはセインの腕を掴むと、足早に子供の中を歩き、ルーカスの目の前にセインを連れてきた。

ルーカスは笑つて、幼いミシェルに聞いた。

「その子にするかい？」

問い合わせられたミシェルは嬉しそうに頷く。

「うん！」

笑顔のまま、セインに話した。

「今日から、君は僕の弟だよ」

その瞬間、幼いミシェルは幸福に包まれた。おばさんも子供達も幸福に包まれた。記憶を見ていたミシェルも幸福に包まれた。

セインが初めて笑顔を見せたから 。

「ミ・・・・ 様」

「う・・・ん」

「ミシエ・・・ 様」

「ん・・・」

「ミシェル様！」

セインに怒鳴られ、ミシェルはバツと起き上った。

「セ、セイン・・・。声が大きいよ」

キーンと耳鳴りがする耳をミシェルは塞ぐ。セインは慌てて、謝罪した。

「すすすすみません！耳は大丈夫ですか！？」

そんな姿にミシェルは笑つてしまつた。

「ミシェル様？」

ミシェルは笑いが止まらなかつた。それは幸せだつた。そして、温

かかつた。

セインも、そんなミシェルを見て、笑つた。

（良かつた・・・。セインがちゃんと笑顔になれるようになつて）

二人は笑い続けた。お腹が痛くなるまで笑い続けた 。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2477z/>

赤い道化師の箱

2011年12月19日19時54分発行